

九州大学蔵〔林屋正蔵咄本〕改め「忠臣蔵道化縁起」翻刻と解題（上）

前田，桂子
長崎大学：准教授

<https://doi.org/10.15017/1811265>

出版情報：文献探究. 54, pp.1-14, 2016-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

九州大学蔵「林屋正蔵咄本」改め「忠臣蔵道化縁起」翻刻と解題（上）

前田 桂子

一、解題

本書は九州大学図書館蔵「林屋正蔵咄本」として目録に掲載される板本一冊である。^{注1}題箋（「破れ」）屋正蔵坊著も明らかに後人の手によるもので内題も欠くため、目録の資料名は仮称である。識語から林屋正蔵作、五雲亭貞秀画ということに分かるがそれ以外に本の素性を示す記述はない。しかし、作者を手がかりに検索すると、早稲田大学図書館のデジタル画像『忠臣蔵道化縁起』（以下、早大本）と同じ本とみて、間違いなさそうである。さらに国書総目録には、『忠臣蔵道化縁起』は天保八年（一八三七）に永寿堂西村屋与八から刊行された滑稽本『宝合勢貢の蔵入』の改題本とするので国立国会図書館蔵（以下、国会本）と対照させてみたところ、こちらも版本は同一のようである。国会本は六卷三冊である一方、本書は丁数表示のない、三十二丁の一冊本であるが、十丁ウラ、二十一丁ウラと三十一丁ウラに該当する部分に作者名などの識語があるのは、本来三冊に分かれていた名残とみることが出来る。

各本間には若干の丁の異同が見られる。早大本は九大本の十四丁と

十五丁に該当する丁が入れ替わり、国会本は九大本の十五丁に当たる丁を欠く。この部分は丁の切れ目が内容の切れ目となっているので三本とも読む上では問題はないが、^{注3}十五丁が「酒宴如来の脇土」の話であることを考えれば「酒宴如来」の直後にある早大本が自然かもしれない。いずれにしても、丁数表示がないので、どの本の並び順が正しいかなど、確認するべきがない。

作者名を、早大本は「林至止蔵」とする。九大本は「林屋正蔵」とあるので別の本のようなのであるが、よく見ると文字のバランスが崩れていることや墨の色から、「至」「止」の文字に一部を書き足して「屋」「正」にしていることは明らかである。^{注4}オリジナル本である『宝合勢貢之蔵入』を『忠臣蔵道化縁起』と改題して刊行した際に、版本の一部を削って「至」「止」としたものを、九大本の所有者が手書きで元に戻したものと推測できる。『宝合勢貢之蔵入』にある刊記や広告が九大本と早大本にないのは、改題本という事情によるものであろう。

林屋正蔵は現代でも活躍する落語家の名跡であるが、^{注5}本書の著者は初代（一七八一〜一八四二）とみて間違いない。一八〇六年に初代三笑亭可楽の門下で楽我を名乗り怪談噺の元祖と言われ、「怪談の正蔵」の

異名を取った。著作としては『ますおとし』(文政九)、『太鼓の林』(文

化十二)、『笑話の林』(天保二)、『落嘶百歌撰』(天保五)、『笑富林』(年

代未詳)、『落嘶年中行事』(天保七)などの嘶本があり、これらは西村

屋刊行の正蔵作品に「はなし本目録」として広告が出ている。^{注6}また、本

作品以外の滑稽本に『先開而三升世界』(文政七)、合巻には『尾尾屋於

蝶三世談』(文政八)、『鶉権兵衛物語』(文政十二)、『怪談桂の河浪』(天

保六)、『怪談春雛鳥』(天保九—十二)、『音に菊御家化物』(天保十)が

あり、正蔵の活躍については今岡二〇〇三に詳しい。^{注7}正蔵の作品はい

ずれも絵が豪華で、内容的にも凝ったものが多い。

さて、九大本の資料名には「咄本」とされているが、国書総目録では

「滑稽本」と位置づける。内容の前半は『仮名手本忠臣蔵』に題材をと

り、後半は忠臣蔵の登場人物や歌舞伎の市川団十郎家、源義経など、歴

史上の人物にゆかりのある仏像や御経が登場し、しやれを中心に滑稽

味のある内容となっている。中には落語としても有名な「頼朝若年の

しやれこうべ」の落ちもある。咄本としての要素も持つが、正蔵が自ら

「はなし本」として広告を出す作品が落語さながらの会話体で書かれ

るのは趣が異なり、本書はほぼ独話体である。以上の事から、本稿で

も、「滑稽本」と考える。

『宝合勢貢之蔵入』改題本『忠臣蔵道化縁起』とも未翻刻である。

二、凡例

1 翻刻は九州大学本を使用した。虫損などで解説できない部分

については早稲田大学本、国会図書館蔵『宝合勢貢之蔵入』を参

照した。いずれの本でも判別不能な箇所は「||」で示した。

2 変体仮名は原行の文字に改め、漢字は異体字を含めてなるべく

原本の通りとした。改行も原本通りとしたが、行に収まらない

場合は二行に渡って配置した箇所もある。

3 原本で文字を で囲んだ箇所は翻刻の際にも同様にした。

4 丁数の記載はないが、便宜上、序文を含む全ページに丁数と裏

表を付し、(二ウ)、(二オ)と記した。

5 踊り字について、一字点は「ゝ」「ゞ」で示し、二字以上の点は

「く」「ぐ」を用いた。

6 本文中にある絵図の位置におおよその内容を注記し「」で括つ

た。巻末の画像は本稿に翻刻を掲載した本書の一部である。

三、翻刻

神かみの世よには陰陽いんよう和合わがわの道みちを躰みとのまへ合あ時とき生なまと晒しや落れ。天竺てんてくにては菩ぼ提だ薩さつ垂ちを菩ぼ薩さつと略りやくす。浮屠うとく氏しの晒しや落れ。唐國からくの莊周そうしゅうは。言いはずと知しれたしやれたた寓言いやくごん者しやにて。しやれたた嘶しで

世を渡る。時代僕は御江戸の生れ。友にそやされこんな馬鹿になられた。頓智京傳柳亭馬琴。妙なる作は多けれど。書て雪麿や三馬が述べた作意はすいくの酔。作に明さぬ夜半もなし。晒落がこうじたたわごと。魁見する梅の木に彫つけて「ラツト待たり版木に彫るは桜の木でござります」そこは承知椀久の物狂ひじやから。是も矢張木違じやと。口はへらねど年々に。高くなるのは鼻ばかり。木の葉天狗の爪の先この半張をひつかくものは

作者の真似をして人の目を

くらまさんとする

林屋の正蔵坊〔花押〕(二才)

大星由良之助守本尊

是に敬ひ奉るは大ぼしゆらの介の守本尊

両桂将某のおん作飛車飛傳の

尊像御尊躰を拝し奉るに左りの

御手に金銀の宝塔を持右の御手には

▲香車の鐘一枚つき

たゞせ給ふしかるにこの

尊像は角の横道を

さらはせ給ひ飛車のすぐ

なるを守り給ふがゆゑ

飛車ひでんとは申奉る也

大ぼしゆらの介此尊像を

念じ給ふゆゑに主敵

武蔵の守をすみべやへせつちん

づめとなしたるも此神のいとくなれば

御信心のともがらはばんの方へよつて

王手をついて将某さつしやりませう

▲金銀を

とりこむゆへ角の

とふりのさいごだ

王手むねんをはらそふと

おもふ重太郎が

香車先

おもひ

しつ

たか

「すみべやの

すゞみだいに

こしをかけて

ゐたるが

〔由良之助が炭小屋の師直を追い詰めた図〕

飛車ひしゃとつづされた

さりとはよわい

せうぎだ

こなたに敬うやまつひ奉たてまつるは塩治判官御えんやはんくはんひさうの
道具どうぐにして大星由良おほしゆらの介すけへかたみに

下くだしおかれしなま木きだ丸まるとなづけし名刀めいとう也
すなはち
則すなはちこれなるは右みぎの名作めいさくの折紙をりかみにて本阿弥ほんあみ
くはうあつせうにんごしんひつ
光悦上人御真筆そのおんうたなり其御哥そのおんうたに

「なま木きだに火吹ひふきが竹たけの

さやごゝろわらつばならで

つかなたわしそ

したゝめたるなり参詣さんげいのめんく

御ごさいごの御ごむねんのかんじ給たまひ

なま木きだくくと

称名しょうめいとげられませう

里見義實さとみよしざねの陣太鼓ちんたいこ

是これにかざり置おく所の太鼓たいこは

そのむかし安房あはの国くにの住人ぢうにん

里見治部太夫義実さとみぢぶのたいふよしざねの

侍女じぢよおまんといふもの

(二オ)

〔刀の図〕

なまきだまるのかたな
生木陀丸 刀

(二ウ)

なま木きだに
火ひふきか竹たけの
さやごゝろ
わらつばならで
つかな
たわしそ

くわうあつせうにんふで
光悦上人筆

ありしがあるとき主人しゆじん

とふていわくおまんごこへ

いた油買あぶらかいにちやアかいに

油あぶらやのゑんに氷こほりがはつて

すべつてころんで油壺あぶらいづしやう升じらう

こぼして太郎殿たろうどのの犬いぬと次郎じらう

どのゝ犬いぬとみんななめてしまつた

つゞき といひければ此このとき

義実よしざね大きにいかり

其犬そのいぬどうした

こたへて曰いひ

伏姫ふせひめをつれて

富山とやまへ入いつて

金碗かなまわりに

うたれて

其皮そのかははいで

大川いぬかはであらつて

犬山いぬやまでほして犬村いぬむらで

毛摺けすつて

▲犬田いぬたで

延のして

(三オ)

〔つぎへ〕

〔屋根上で武将二人が戦う図〕

(三ウ)

〔陣太鼓の図〕

犬坂へやつて犬飼へ賣て

〔屋根上で武将二人が戦う図〕

犬塚で請てその皮にて

張たる太鼓はすなはち是なり
曲亭の曲抱におもしろき

音色を出して八犬傳でんと

世にひゞきたるはこれでござる

誠に奇妙なる趣向よつて

讀つしやりませう

鎌倉の諸寺諸山に開帳

多くある中にもことに

建長寺の

靈宝は

ありがたき

品あるとて

諸人群集

しておし

合くするうちに

言立のものを上下

をためつけうやくしくたちいで

下にくと諸人をしづめ

エヘンとせきばらひを

してあり難くもこれ

なるは清和源氏の

正統六孫王経基公

より十三代の後胤

左馬の頭義

朝公の三男の

御公達

建久三年

將軍と

つぎ

ならせたまふしかる所正治元年正月十三日に御齡

五十三才にて薨じ給ふ源の頼朝公の御しやれかうべなり慎みて

御拝あられませうとうやくしく臺のうへの羽二重のふくさ

をとりにければみなく同音になむあみだ仏くといふ中に老人

の男がもしく言立のお方へお聞申たい事がござります

頼朝さまはかしらが大きいとうけたまはりました

思つたよりちいさうござりますといひければ

言立の人ぬからぬ顔で是はこれ

頼朝公十二才の御時のかうべなり

〔碁盤上で武将二人が戦う図〕

一節赤穂忠臣經

大序鶴岡將軍社參鹽谷

御臺兜見分師直惠羅惚

桃井口論鹽谷挨拶段切

第二段目力弥使者小浪

戀慕桃井立腹本蔵松切

而加計出壽

第三段目勅使饗應師直

出仕途中賄賂種々金銀

沢山伴内仰天師直追從

仁田義貞の

御兜なり則本阿弥

書付あり

香ふは

安抹香ではござり

蘭奢待の

気をつけて

かゞツしやりませう

力弥がしうげんの

「刀は正宗差添は

波の平行安を

〔兜の図〕

〔六才〕

〔刀の図〕

本蔵公何之角之饗應拜

見同道桃井出仕師直段

段詫伴内御背中何野加

野追從其次塩谷出仕御

臺狭夜衣返事師直肝癪

前躰塩谷大名尔似合奴

内義之返事自身持参少

不念殊尔今日者勅使饗

應三三日延多羅能多之

蛇師直焼無茶井戸之鮎

比利比利段段悪口塩谷

儒者に讀で

波平にして

行こと安しと

御寺の和尚に

よみて

波平行安と一笑く

〔五十両を擬人化した

本尊の図〕

守本尊
与一兵衛女房
まもりほんぞん

〔七才〕

短気短刀抜而切付而壽

加喰多是茂切付寸仁突

多方加能多蛇

第四段目石堂上使山名

悪口大星出仕遅加津多

御臺愁家中葬禮扱々而

氣之毒段切

第五段目勘平鉄炮場定

九郎真黒死駄懐中五十

両勘平志目多人於殺而

鉄炮除の守は是より出ます

〔猪の掛軸の図〕

天の與の此金有難猪之掛物

猪よりさき一さんにといふが勘平はあしが

「棒もいろくある

うちに塩冶の家来がまいない

せぬのがしわんぼう

判官はばしよも

〔棒の図〕

金取而天之與登和味伊

事言於留勘平猪従先逝

第六段目親父死骸持参

婆様立腹勘平財布見而

無返答切腹両士死骸見

而恟少不念勘平本望血

判両士財布懐中五十両

第七段目力弥使者御臺

書状大星内見釣燈籠而

讀憎於輕茂二階加羅讀

憎九太夫茂椽之下而讀

定九郎は大どろ

うちからおかるは

勘平が女ぼう

勘平とりまく

とりてがつまぼう

さぎ坂伴内二ほん

ぼうしうげんさせうと

お石がもつたは

白木の三ぼう

十一段めで高の家来

うろたへさわぐが則

〔燈籠と鮎の図〕

「この

とうろうの

内なるは足をいたゞく蛸薬師

にくいさんにながらながかいてあつた
憎三人乍何賀書而有多

さくしやはつちやしらなんだ
作者 計 知難多

だいはちだんめみちゆきたびちのよめ
第八段目道行旅路之嫁

いりだめうのぎやうれつみてそな
入大名之行列見而曾奈

たのよめいりもあのよふにし
多之嫁入茂阿野様仁仕

たいとはごひやくこくのまたもの
度登和五百石之倍臣仁

わちとむしがよい
和少虫賀與井

だいくだんめおやこがながのたひ
第九段目親子賀長之旅

ぶじでつくおりんがとりつぐむすめ
無事而着於林賀取次娘

がぎにつくよめいりがいちやつく
賀座仁着嫁入賀伊茶附

て
手を出して 如來の尊像なり(八ウ)

さんけい ひび
参詣の人ぐ手には

およ あは
及ばぬ足を合せて

なまいかくと

ゑこうさつしやり

ませう

〔駕籠の図〕

(九才)

〔講釈師の図〕

とち

めんぼう

おもてのこむそがむかつくりきや
表之虚無僧賀胸悪力弥

がやりでつせうじがぼたつ
賀鍵而突障子賀場多附

このつき まき
此次の巻へ

れいほう
あらはず霊宝は

ひだ
左りゑく

これ
是なるかこのうちの石は人皇

せんくはてんわう ぎようひ理ん くに
廿九代宣化天皇の御宇肥前の国

まつら おとも さでひこ
松浦の郡に大伴の狭手彦といふ

ものありしが新羅国の軍に大将

として唐土へさしつかはさる妻の

ひめ
さよ姫にわかれて泣々舟にのり

おき いで ひめやま あが
沖に出たり其時さよ姫山へ上り

ころも ひれ
衣の帔をあげて舩をまねきつゝ

なきかなしみ舟の山かくれになる

まで見おくりくついにいきたへぬ

いっしん
一心こつて石となりしとある事は

むかしより人々のしる所これは

それにひきかへてゑんやの家臣(十才)

おの九太夫はかほよ御前よりのふみ

ゑてなわうつかたきがかくれてみなく
得而繩打敵賀隠而皆々

また

九太夫が

石のゆらひは

氣尾打矢間賀見附而塔

堂首打悦 涙之波打皆々

てをうつとてからどんくはて
手尾打登手加羅頓々果

太鼓打一説赤穂忠臣經

是が本の

南具佐弥陀南具佐弥陀

をさきひこうがためかごの内にて

石となられたりゆらの助がさび

がたなのためしものにてついに此
世をさられしはまことの石となる

べぎぜんひやうなり 御しんぐくの
御方は御供にはかも川の水ぞう

すいをあげられませう

伴内だんぶつ

伴内だぶつ

林 屋 正 蔵 作 (十ウ)

夜光の二ツ玉

是に敬ひ奉つる夜光の二ツ玉としやうじ奉るは塩谷の

家臣斧定九郎といふもの百姓与一兵衛をせつがいなして

五十両の金をとりゆかんとするうしろよりいづくともなくとびきたり定九郎の

むないたをつらぬいたり実にごうよくのむくひはがんぜんなりおのくきいと思ひを

なしせうめうもろともになまりだくと

御拝あられませう

○是に掛奉つる三尊仏は歌舞

〔夜光の二つ玉の図〕

伎山狂言寺の本尊六月

廿九日の夜しかも其月にゆへに

晦日はやみだ如来と申奉る

むかしは御はだの衣は縞の大ひろ袖

御かしらにははたての頭巾をいたゞき御手と

足には黒きもめんのかうかけきやはんをめして丸ぐけのどんぼむすびにて

ありし所安永の頃より中から開山秀鶴上人黒羽二重の小袖朱ぎやの大小に破れ

傘を御手に持今のさまに替りしもひとへにこの御佛の御利益にて今に芝居

はんじやうのもどるとなる脇士にたゞせ給ふは勘平どのは三十になるやならのかすが

の御すいしやく芝居好のおんかたは舞臺前へちこうよつて見物のあられませう

(十一オ)

定九郎は与一兵衛よりまさりて

つよく勘平はしうとゆへ

与一兵衛よりよわく▲

与一兵衛のつえ 弥五郎の

ぢんがさ

〔杖と陣笠の図〕

〔やみだ如来の図〕

▲定九郎は勘平に

うたれてより 是を

たとへば虫けん

よく似たり

こなたに敬ひ奉まつるは極やみだ如来は

(十一ウ)

嶋黄金の財布ばさつ御作也

此らんしやうをくは

しくたづね奉るに

鉄炮あめのしだう

天皇の御宇此海道は

佛法としてがてんのちよく

じやうをかふむり定九郎谷の狂言上人

御ひみきの見物連中ぼうへさづけ

給ふ也まことに此御仏は四十九日や

五十両合せて百両百ヶ日仏前供

養まもらせ給ひ金が敵の世の中を

さいどし給ふ狂言あらたなる尊像なれば

是なる箱の内の棒は塩谷の家主

四十七人主恩をおもんじ主敵むさしの

守の屋しきへ夜討せし月は十二月

日は十四日の夜なりしが大雪にて

しんくたる所へふいにうち入しゆへ

高の家のさふらひはねげ

こゑにてそれとうぞくかおしこみか役味ん

どもはをらぬかねぎへよるとけがを

する大こんのふといやつからみ

▲印より 訥升の

おんかたも

錦升の

おんかたも

市江よつて

白猿の

むす

ばれ

ませう

▲へつづく (十二才)

▼▲印より 手打にせよと

うろたへ

まわし

たる所の

とちめんばらは

是なり

御しんくの

御方は蕎麦へ

よつて

になつてはたらけくとうがらし

ものは目にも見よちかくは四谷の

深代寺鎧も何も鴨なんばん

鉄の筋がね小手脚あてりよぐわいがあらば

酒宴道楽尊像

是に安置し奉るは忝なくも天竺にては透腹奈国

朝唐仰飲大王の皇子母は則呑多

(酒宴如来の図)

良女と申奉りこの皇子を生給ふ皇子年十才の

御時より飲事を知陀太子と申奉つる其後檀特山より出

給ひ酒宴如来と尊称し給ふ此とき天竺の佛師

美酒熱爛天のすなはち作仏なり或ときは長時長夜の長酒に夜

をあかしてはおもしろ狸にうち乗りて宇頂天に昇給ひ多くの酒屋

に借錢檀のいひわけなく拂は横に寐釈迦となし給ふ

これを怒りて捻上戸の無利屋の大臣酔どれの御ほとけを

鴻の池へ打こみしが元より尊とき木像なればなんともおも

わずいけしやアくまじくと泉川へながれ出て池田伊丹の灘

を越唐土へわたり竹葉に般若湯をそゞぎて呑飲李白は

壹斗詩百編の念仏を衆生へさづけて酒代の冥加銭を

あがられ 壹ツばい

ませう

▼▲印へ

(十二才)

つぎへ (十三才)

取給ふ 其後宋の代にいたりて東大寺の泥田坊はじめて此日の
本へ御連申し漸暈は三暈院の御宇造作賣居を求め給ひ
京都は酒の里に住給ふ諸所の酒屋へ友だちの矢大臣左大臣を
つれて中臺に座し給ふ酒の酒宴如來はすなはち是なり爛の
よき所を吞ふ酔て五はいあがられませう (十三ウ)

大食勘釜足公御作

〔守本尊の図〕

是に敬ひ奉つるは塩谷
判官高貞の御臺所
かをよ御前の守本尊
なり尊躰を拝し奉るに▲

御むねはわさび
おろし御肩は初かつを御腹は
皿鉢御すそはふきん御光は丸ぼん
御手六本にてせつかい大こんさし
包丁猪口 つぎへつゞく(十四才)

つゞき ちろりにてまな板の上にたゞせ給ふ御足のすりこ
木は口につかはれるといふしやうこ也もしもたらぬ時は質の
通を御手に持裕をまげてなんでもかをふよく
御ぜんも酒もしんだいも

〔大杯を飲み干す顔世御前の

のみつぶざんとの 掛軸と、観客の図〕
御せいぐわんなり大食の
御方はまゑ方へよつて

五はいあがられませう

(十四ウ)

酒宴如來の脇土に立せ給ふは開運寺金為卿の守本尊分限
菩薩の尊像なり百錢丹の新吹にして則五斗上人の御作也
右の御手には土蔵数ヶ所の鍵をもち左りの御手には地面株
式の帳面を持給ふ正念金二朱八片にして小判一両に換給ふまた
銀一朱十六にして金一両になし給ふ貧窮にして高利の淵へはま

りどうもこうも首のまわらぬ衆生をすくひとり給ふが又しても
またしても貸てくれ借たいといふ苦る獅子を足下にしたがひぎう
の音も出させずとの御せいぐわん其むかし傾城の梅がえはこの
御佛を祈りて無心の金を願ひ三百両の金を得たるもひとへに
信心のとくなり金が敵の世の中の衆生を濟度し給ひたちまち
福者とせんとの有がたき御せいぐわんちかうよつて御機嫌のとられ
ませう

○是なるは酒宴如來の脇土に立せ給ふおいらん外八文字菩薩の
尊像なり其むかし慶長
十七年の頃庄司甚左衛門が
開基にして北郭

「ふところろはから
しゝで物前は

くるしゝ

いのしゝの

くびがまはらぬ

ゆへはぢを

角兵へじゝと

しつてしゝ

しんちうの

むしんにきたが

こうふまれても

金さへかりれば

うれし

や

〔客を踏みつける分限菩薩の図〕

ちうさんじ とりたてすなはち
中山寺を取立則この

みほとけ たいふ くひある まつ たいぼく
御仏は太夫の位ある松の大木にて

きんみだて おきやく はじま
刻立そもく御客の初りは弓削の

(十五ウ)

注

1 九州大学附属図書館 九大コレクション [林屋正蔵咄本]

(http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/1398185/kokubun241_43_154.pdf)

2 早稲田大学図書館古典籍総合データベース

忠臣蔵道化縁記―林至止蔵 作・五雲亭貞秀 画

(http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he13/he13_02420/index.html)

3 三本間の異同は次の通り。

九大本の丁数	並び順	
	九大本	早大本
十四才	1	3
十四ウ	2	4
十五才	3	1
十五ウ	4	2
十六才	5	ナシ
		国会本
	5	3

4 本頁下段の国会本画像(上巻裏見返)の「林屋正蔵」と次頁九大本画像(十ウ)の作者名「屋」「正」を対照のこと。

5 文化八年(一八一一年)の初代から四代目までは「林屋正蔵」、五代目以降「林家」となる。当代(二〇〇九年襲名)は九代目。

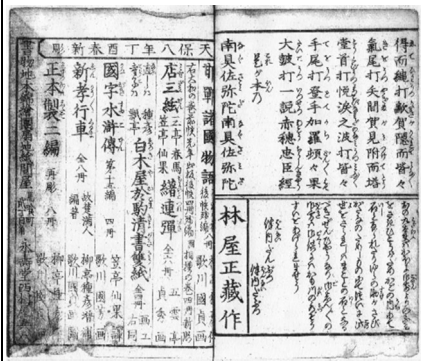
6 いずれも東京堂出版『斬本大系』に翻刻あり。

7 今岡謙太郎「林屋正蔵―怪談咄の創始者」

国文学解釈と鑑賞八六三号 二〇〇三年四月 至文堂

(まえだ けいこ・長崎大学准教授)

「宝合勢貢之蔵入」（国会本）の画像に九大本と異なる頁
 上巻見返・・・刊記
 左は本書一才と同一の版木
 上巻裏見返・・・広告
 左頁は本書十ウと同一の版木



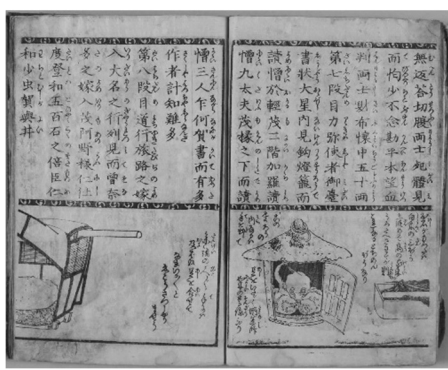
中巻表見返・・・刊記

「九州大学蔵 忠臣蔵道化縁起」の画像（抜粋）
 一ウ、二才
 三ウ、四才



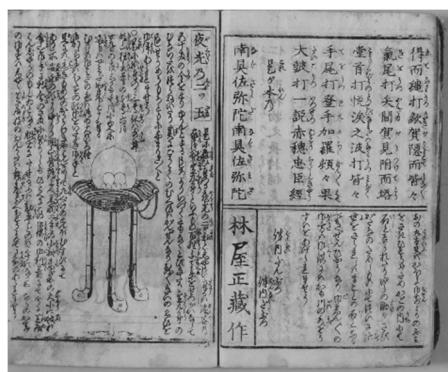
五ウ、六才

八ウ、九才



「九州大学蔵 忠臣蔵道化縁起」の画像 (抜粋)

十ウ、十一才



十四ウ、十五才



十二ウ、十三才



十五ウ、十六才

